

---

# テンプレワールド～魔王は退治されたくありません～

西美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

テンプレワールド～魔王は退治されたくありません～

### 【Zコード】

Z6185Z

### 【作者名】

西美

### 【あらすじ】

定番の剣と魔法の世界の物語。ネットで連載される小説の作者は中学生。

その物語の魔王と攫われた姫の替え玉は、物語に不満を持ち二人で反乱する。自由を求めるために。物語とは違う裏の物語。一人はその世界に自分達を解放する自由を求める旅に出る。それは閲覧者がいない時間。そして出番のない時間。限られた時間の自由に一人が見つけた答えは。

## 自由になりたい（前書き）

勇者＝モナ

城の姫＝ココア

魔王＝サウロ

姫の替え玉・宿屋の娘＝プリン

これは中学生がネットにて連載を始めた物語の裏の物語。

## 自由になりたい

その世界はある中学生が気まぐれに作った世界。  
剣と魔法の定番の世界でヒメリもなく  
世界は作者の思うままに進行する。

そう、勇者モナが城の姫ココアを攫つた魔王サウロを退治に行く話。  
ネットで公開されたその話は長編で、ゆっくりと話が進む。  
そして登場人物達も作者に運命を託して演じくる。

「だからなんで私が身代わりになるのよーー！」  
そう女が喚く。

正確には攫われたココア姫。

金の髪を必死で振り回し、体を縛る戒めを解こうとする。  
それを、うんざり顔で見ているのが、攫つた張本人。  
この世界の最強にして最悪の魔王サウロ。

だがサウロはうんざりしていた。

「仕方ないだろ、そういう設定なんだから」  
大きくため息をつく。

見た目は変身前なので普通の美形キャラだ。

だがサウロは予感している。

どうせ変身してドラゴンとかになつたりするんだる。  
でもつて無敵の勇者の光の魔法で最後は退治されるんだ。  
ハーコと大きなため息をつくサウロ。

それを見てココア姫は怒鳴る。

「ちょっとため息つきたいのは私の方なんだけどーーー！」

サウロはチラリと緑の目でそれを見て、またため息をつく。  
現在は誰も読者がこの話を見ていない。  
だからこそ、つかの間の自由なのだが

「どうも攫つてきた女がうるさくてたまらない。  
こつちも好きで、こんな事しているわけではない。

「だからさ〜私は替え玉なんだって」  
必死で訴える。

「町娘なの！宿屋の娘なの！なのに金髪だからって  
これはあんまりじゃない？」

自分に言われても困る。

サウロは黒い長い髪をグシャグシャとかき乱す。

「どうせ、勇者はお前を助けに来るさ、それでいいじゃないか」  
慰めたつもりだったが、火に油を注いだらしい。

「それで本当は姫じやなかつた。でも愛してゐつて低脳過ぎるわ」  
「俺に言われても」

「本当、この話つて馬鹿みたい」

ここで嘆いて文句言つても仕方ないのだ。

全ては作者の手のひらの上。

いきなり世界に光がともる。

閲覧者が来た合図だ。

「はははは、姫よ、そう脅えるでない」  
「やめて…助けて勇者様」

ブルブルと震える娘に魔王は、その手を伸ばす。

「お前は勇者を呼び寄せる餌だ。だから大人しくしてこよ」  
「やめて」

「勇者を倒し、そして世界を暗黒の闇に落とす！…」  
「いやーーっ！…」

泣き叫ぶココア姫の替え玉は、自らが別人だと告げる以前に  
その魔王サウロの恐ろしさに震えるばかりだった。  
つづく…

フツと光が消える。

「あ一面倒くや」

姫の替え玉が言ひ。サウロもうござりだつた。

「おこ、ところでお前名前は？」

「私？プリンよ。嫌になるわよね、ダサイ名前

あーヤダヤダと舌を出す。

先ほどまでの演技とは別人だ。

「しかも、この後の展開知つてる？」

「いや、俺は倒されるんでな」

「その後は最悪よ。勇者が私と姫との三角関係に悩むの」

「ふむふむ、それで？」

「そつから先はまだ作者も悩んでるみたいだけど

最悪のパターンは一人共に恋人になつてハーレム展開よ

「ほーっ、それは男のロマンだな

「馬鹿じゃないアンタ」

サウロが目をむく。さすがに魔王に向かつて馬鹿はない。

「女をなんだと思つてるのよ！－」

「いや…死ぬ運命の俺からすれば生きれるだけでも幸せだらつ

「あんたは見せ場あるじやない」

「それでも最後は無様に死ぬ予定だ」

そして自分が死んで世界は幸せになるのだ。

無言で互いを見つめあつ。

「私達ってなんだろうね」

「ともかく全ては作者次第だな。ビリ也可能さ

より深くため息をサウロはついた。

だがプリンは言った。

「あきらめないわ！－」

プリンが立ち上がる。

「とりあえず繩ほじこじよ

「いや……また次の出番がきたら縛るのが面倒だ……」

「いいから、もう次の話の作業に作者が入ってるわよ」

確かに世界が少し、ゆつたりと動き出したようだ。

二人は感じる。

この次の話の展開を。

「とりあえず勇者モナの出番で私達はちょっとオヤスミね」

「そうだな、やれやれだ」

繩を解いてやつた後、肩をもみつつサウロが答えた。

そんなサウロの肩をバンと掴むプリン。

「なんとかしましょうよーーー！」

「なんとかとは？」

肩をバンバンと何度も叩かれる。

「何があるはずよ」

「いやだから無理……」

「あんた本当魔王なの？あきらめ早すぎーーー。」

こうこうキャラにしたのは作者である。

「ともかく、自由になればいいのよ」

「自由…だと？」

一番サウロからは遠い言葉だ。

だが、なんと心地よい言葉なのか。

「あるはずよ……きっと…だから」

「だから？」

プリンはギッとももない宙を見上げる。

「自由になつてやるーーー！」

「いや…だからどうやつて？」

やはり、この女は苦手だとサウロは内心ウンザリしていた。

「ともかく自由なのよ、少しほ

言いたい事はわかる。

「ああ、次の出番はとりあえずないな」

「だから、とりあえずこの世界を探しましょう

唐突の提案だ。

「探す？」

「そうよ、自由になるための手がかりよ」

「そんなものが…どうやって」

プリンが叫ぶ。

「あんたの魔法があれば、すぐにここに戻つてくれるわ」

「確かに…だが…」

「探せばいいのよ！－何もしないよりマシ。あんたはこのままでいいの？」

死んでいいの？馬鹿みたいじゃなし、この話……」「

サウロは田をパチクリさせてプリンを見る。

確かに、だがあるのだろうか…そんな可能性が？

「何もしないよりマシか…」

「そう、どうせ話が進めば私達はまた縛られる」「  
つかの間の自由に自分達の本当の自由を探す。  
作られた設定としての反乱。それは作者からみれば  
ないはずの物語。」

自分の進むべき設定は決まっている。

途中がどう変わっても最後は死ぬのだ。

「やつてみよう」

サウロは覚悟を決めた。

やつた！－とプリンが喜ぶ。

そして一人のキャラは秘密の物語を進める事になった。

## 自由になりたい（後書き）

見切り発車です。ボチボチ続けます。  
とりあえずラストは決まっているので完結はします。

## ピッククリスマスライム

サウロの魔法で二人は世界に飛び出した。  
と言つても、所詮は作品の世界の中。  
まだ作られ始めのこの世界は曖昧だけれど  
最低限の枠組みは出来ていい様子だ。

「とりあえずモナが今演技している城下町はバス」  
「だな…なら森しかないな」

サウロはプリンの手をとつてワープする。  
この時ばかりは魔王としての強大な魔力に感謝した。

二人が歪み、そして形はすぐに整えられた。  
ついた先は森フィールド。

魔王と宿屋の娘は大きく深呼吸をする。  
「こうやって少しでも自由に動けるのって最高」  
上機嫌でプリンは背伸びをする。

「そうだな…さてどうするか」  
「んーとりあえず誰かいないかな?」

「森にか?」

「まだ作者の設定では戦闘シーンしか設定していない森だけど」  
何もしないよりはマシと二人は歩き出す。

想像の世界なのに、一人にとつては世界そのもの。  
明るい日差しがサンサンとをして心地よい。  
サウロも陰鬱な城よりは、幾分が気持ちが良かつた。  
テクテクと一緒にアテもなく歩く。

ガサリと音がする。

反射的にサウロはプリンを背に庇つた。

彼女の設定は替え玉でしかなく、戦闘スキルなど皆無だ。

いきなり一人の前にスライムがプルプルと飛び出した。サウロが手をかざし消し去ろうとする。

だがプリンがあわてて

「ちょっと殺したらダメ！！物語が変わつてバレちゃうじゃない」と止められて、手を引っ込めた。

だが、どうしたものか、スライムは戦闘態勢に入つてゐる。

流石に魔王である自分が「スライム」ときに負けるのは嫌だ。だが、攻撃が出来ない以上は防御するしかない。

思案にくれるサウロを無視してプリンはスライムに話しかけた。

「出番はまだだから落ち着いて」  
スライムは少し震えた。

「私達が戦う相手じゃないでしょ？ 設定を思い出して」

プルプルとスライムは逃げた。

あえて追わず、二人で見送つた後にサウロは深くため息をつく。「助かつたのか？」

「話せばわかるみたいね」

一人うんうんと頷くプリン。

「しかしあんたって本当齧キャラよね」

「仕方ないだろ、こういう設定だ。お前こそ…」

「あら私は替え玉で姫様のライバルとしてお転婆にされたのよ」  
少し悲しげに言うプリン。

森は静かだった。

少し世界が揺れる。作者の物語が動いたようだ。

「今日は更新が早いわね」

「だな」

作者の中学生のきまぐれな世界。

そして自分達はそこで生まれ翻弄されるだけの存在。

「つて見てよ！！」

プリンが指差して叫ぶ。

魔王がゆつたりと視線を向けたその先で。  
スライムの集団が、一人に向かつて走つてきていた。

「おい…これは…」

「しらないわよ！！」

固まる二人。

いざとなつたら逃げるしかない。

やはり、あの城に大人しくいるべきだったかと自問するサウロ。

話が少し進む。二人はそれを感じ取る。

だが、スライムの集団攻撃などの設定は見当たらない。  
スライムの設定は…

「ええええ！！キモイ！！これが合体？」

プリンの唖然とする目の前で

複数のスライムがフヨーンフヨーンと重なつていく。

そして全てが組体操宜しく重なると

ムニョツッ！！

と大きな音を立てて合体した。

「ビックリスライムだな。設定通りだ」

大きな一つのスライムがそこにはいた。

「魔王サウロ様ですな」

いきなりスライムに話かけられた。

「ああ、そうだが」

「魔王様に会えて感激です」

プルプルと嬉しそうにビックリスライムは体を揺する。

「どうしてこんな所にいるんですか？」

「いや、少し散歩をしてる」

悠然とサウロが答える。

「そうですか…しかし勝手に移動されたら…」

「いや、すぐに出番がきたら魔法で城に戻る」

「しかし僕達の王の貴方にあえて本当に嬉しいです」

プルンプルンと体を再び揺らす。

「心残りがなくなつた。ただ倒されるだけの役目ですからね僕はその言葉にギクリとサウロは身をすくませる。

「あんたも一緒に行かない？スライム君」

プリンが提案した。

「おい…また何を勝手に」

「それ位は魔王の魔法でなんとかならないの？」

「そういう問題ではないだろ？」

「このスライムも可哀想じやない…！」

スライムは何を言つているのか？と不思議そうに一人を見る。

「スライム君を移動させる位はできるでしょ？」

「移動させるだけなら簡単だがな」

「なら一緒に連れて行きましょっよ」

一人で、ああだこうだと静かな森を賑わせていると突然に世界に光が広がつた。

「閲覧者！！」

二人が同時に声をあげた。

そしてビックリスライムも慌てて

「隠れて下さい」

と、ブヨブヨと体で一人を強引に草むらに隠した。

そしてサウロが魔法を駆使する前に

本番が始まつてしまつたので見守るしかなかつたのだ。

勇者モナが森に入つてきた。

城から近い森とはいえ、まだ世界にはモンスターがウジャウジャいる。

まだ経験地の低いモナはここでレベルをあげる事にした。

早速、森で一匹のスライムを見つける。

だが、勇者に脅えたのかスライムは逃げて行つた。

「ふん、やはりスライムは一番弱いモンスターだな」

モナはそう独り言を言つた途端に

今度は沢山のスライムがモナに向かつてきた。

「なんだ！！でも集団でもスライムはスライムだ」

勇者の剣を構えて、スライムを迎撃つ準備をする。

「かかつてこい！！何匹でも倒してやる！！」

スライムは重なり、そして巨大な一匹に変身した。

その名もビッククリスライム！！

驚いたモナだつたが、自分の使命を思い出し勇気を振り絞る。

そして

「とりやああああ！！」

剣をふりかざし突進して行つた。

ザクザクと剣で切るも、ブヨブヨとした体にはなかなか傷が入らない。

そしてビッククリスライムはゅつくつとモナの上に覆いかぶさつた。

「何をする…うわあああ…！」

モナはその体の中に閉じ込められた。

「く…苦しい…息が…」

必死であがくモナ。そして消化をはじめよつとするモンスター。

「こ・・こうなつたら…！」

モナは魔力をこめて魔法を使う。

「ファイヤー！！」

ド・ド・ドード・ドカーン！！

ビッククリスライムは木つ端微塵となりモナは助かっただ。そう倒したのだ。

「ふう、さつき町で魔法を覚えて良かったよ」

こうして初めての戦闘に勝利した。

勇者モナは経験地を手に入れた。レベルが一つ上がった。

「さて、はやくお姫様を救い出さないと」

そうして次の目的地に向かうのであった。

続く

息をひそめていた二人はジッと見ていた。

画面が消えて閲覧者がいなくなつた瞬間にこそ自由の時間だった。

そして光りが消えた。

「ひどいっ！！」

プリンは泣いてスライムの残骸に走りよる。

手のひらにのせた液体は小さく小刻みにふるえ  
そして溶けた。

「あんまりだわ！！なにも悪い事してないじゃない！！」

「仕方ないさ。モンスターは倒される生き物だ」

「だからって……」

納得がいかないプリン。

だが仕方ないのだ。ここはそういう世界なのだから。

「まだそいつは知能が低かつた。何の疑問も持たずには

本来の役目を果たせて良かつただろうよ

土に穴を掘り、そこに残骸を入れてやる。

「生き返らせてよサウロー！出来るでしょ」

これみよがしにサウロはプリンにかぶりを振つた。

「でもあると感づか?」

「…」

わかつているのだ。プリンも。

だが、そう言わざにはおけない気持ち。

「勇者つてヒドイよ」

「だが彼もそういう風に作られたキャラだから…」  
自分も、そしてプリンも勇者も全て作られた設定。  
それに忠実に生きるしかないのだ。

「後悔してる?」に来た事…」

涙目でプリンはサウロに聞いた。

「いいや」

「本当?」

「とりあえず雑魚キャラとはいえ、こいつの墓を作つてやれた」「うん」

なんとかプリンが笑つてくれたので安堵する。

「ともかく城に帰ろう。また出番が来るかもしけない」「わかつたわ」

二人は手を取つて、自分達の舞台である魔王の城に帰還した。

## 城下町

魔王サウロの声が城に響き渡る。

「なんだと！…勇者が私を倒す旅に出ただと…小賢しい…」

バサリと黒いマントを翻し、サウロは忌々しそうな顔をした。

「たかが小僧一人！…とつとと潰してしまえ…！」

そして振り返り、ココア姫を見て笑う。

「お前はここから勇者が死ぬ姿を泣いてながめるがいいわ

「いやああああ

空に黒い雲が覆い、そして稻妻が激しくなった。

まだまだ勇者モナの旅路は遠い。

つづく

「あー本当馬鹿馬鹿しい

あーあ、背伸びしてプリンは立ち上がった。

「まあ、それが本来の自分達の仕事だしな」

「とりあえず今回の私のセリフはきやあーでした」

閲覧者が消えて出番が終わった二人は

つかの間の自由の休息に入る。

城内の黒い石畳の上に座り込み

プリンは金の髪を手で撫でた。

口を尖らせてサウロに言つ。

とりあえず、まだ次の展開を作者が書かない限りは

動きようがなかつた。

少しでも世界が作られれば、登場人物である一人には感じる事ができた。

それがまだない。

「暇だわ…城を探検しようにも、そこすら設定できていないし」

二人は行き詰っていた。

「ねえ、自由になつたらナーッようか?..」

唐突に答えてから質問をしてくるのがプリンの特徴だ。

「なつてみないとわからん」

率直に答える。

「わづよね」

「お前はどうしたいんだ?」

「んー…と額に手を当てる仕草はなかなか可愛いものだ。

「なつてみないとわかんないわよね」

ただ一人は自分の運命をかえたいだけ。

きっとそれは創造物として願つてはいけない願い。

だけども、一人はほんの少し動き出してしまった。

つかの間の自由を。

「いのまま、いにいでても仕方ない事だし

前回にバスした城下町でも行つてみるか?」

スネるプリンを見かねてサウロが提案した。

途端にプリンがパツと笑顔になる。

「うん！ 行く行くうー！」

「だな、当分はあそこも舞台にならない様子だし。

「氣分転換にでもなるかもな」

「せつたーー！」

その場でピアノを弾き、と跳ねるプリン。

どこか羨ましくサウロは見つめながら

「この姿ではさすがにダメだな」

わざいたかと懸り、その場でシハム一回転した。

闇をまどたた美青年の姿が一瞬にして平凡な町人にかわる。

これが！？！嬉しい！？！それが！？！

「ああ、どうで僕がのんびり未定にしていいかな?」

女に化けれる?他には?ねーねー

「お前は私に何を求めてるんだ？」

迷惑そ  
うにプリ  
ンを諫め  
て、手を繋ぐ。

そしてサウロの魔法によつて一瞬で城下町に辿り着いた。

勇者がスタートした城下町。

それなりの人で賑わい、一通りの店も並んでいる。

古いヨーロッパな町並みをイメージしたそこは典型的なファンタジーの町並みだ。

二人はそこそこに広いその町を歩く。

「ねーねー、あれ城の中は入れないかしら?」

「無理だと思うぞ? 試してみるか?」

一人で城門の前まで来る。

門番の兵士が立っている。

「(主人公)は勇者様以外はお通しきません」

決められたセリフを伝える。

「ねえ、そんな事言わずに、今は誰も見てないしお願い」

プリンが可愛くねだつてみたが

「ルルは勇者様以外はお通しきれません」

「だから…」

「ルルは勇者様以外はお通しきれません」

「同じ事繰り返さなくともわかつてゐるわよ…」

「ルルは勇者様以外はお通しきれません」

爆発寸前のプリンを制止してサウロが答える。

「ムダだ。ここにまは決められたセリフしか言えない」

「知つてゐるわよ…でも今は出番じゃないじゃない」

サウロが少し悲しげに言ひへ。

「だから、やしまでの血戦が芽生えるキャラドではないことこの事だ」

「どうこうの事か

プリンがサウロを見上げた。

田と田が合つたが、サウロが先に田線を外す。

「ルルのキャラドのセリフを言つだけの背景みたいなものだ。

だから我々のように自我が苏生えない

「背景ついて…」

プリンが息を呑むのがわかつた。

「思ひ入れといふか、設定すらないんだ。Iの兵士には。

たぶん町の人間の大半もそうだろ。無意味だ」

プリンはゼンと兵士を力強く押した。

だが反応した兵士は繰り返す。

「Iは勇者様以外はお通しあません」

サウロが聞く。

「どうしても入りたいなら俺が連れてってやるが?」

だがプリンは首を横にふって拒絕した。

サウロの言つとおり、Iの自由なひと時に会話が成立する者はいなかつた。

決められた動きをして、決められた会話をする。

沢山の人がいるのに、一人ぼっちな寂しさにプリンは身震いした。

「INの人たちは悲しくないのかしら?」

「自分という存在すら認識できていないだのうよ」

「どうこう事?」

「石や木が感情を持つて自分が悲しいなどと思つのか?」

「あんた冷たいね…」

涙目にじむプリン。

「魔王だからな」

そっけなく答えるサウロ。

二人は並んで日の下の町並みを歩く。

どこに向かうでもなくプログラと。

急にプリンが立ち止まつた。

「なら、以前のスライムはどうなのよ…!」

知能低いって言つてたけど会話は成立したわ…!」

それは…とサウロが顎を撫でた。

「それは、最初のモンスターだから作者も少しあは思いいれがあったんだろ？」

そんな会話を続けるうちに一人の心に暗い雲がかかる。

全てがムダではないのか？自由などないのではないか？

やはり、そう思った事 자체がおかしいのではないか？

「もうやめるか？」

サウロが優しく頭一つ下のプリンに問いかけた。

だが自分に言い聞かせるように「プリンは力強く答える。

「嫌よ……」

いきなり世界がゆつくりと揺らいだ。

「物語が少し進んだわ」

「だな……今回は少し展開が遅かったな」

一人で体で次の設定を感じ取る。

「ほう、次は砂漠の町か、名前はオアシス」

「そこに勇者が向かうわけね」

次々にゅつくりと展開が一人の体に染みて行く。

「ふむ、そして砂漠の真ん中の遺跡にてボスと戦ひ」

「ん?なんか女王云々とか、ええつと…なにこれ」

プリンが啞然としてサウロを見やる。

「あんたの昔の恋人だあ？」

返答に困ってサウロは黙った。

所詮は自分の運命など作者次第だ。

「あ、なんか消えた。ええつと設定書き直し」

「私の昔の知り合いで私に惚れていた女王だそつだ」

サウロは苦笑した。

プリンは氣の毒そうにサウロの背中をパンパン叩く。

「とりあえず帰るか」

「うん」

二人は手を繋ぎ、来た時と同じように魔王の城に帰還した。

## 砂漠の町オアシス

砂漠の町 オアシス

過酷な砂漠地帯の中で唯一の水場。

そこには人々は集い、そして町を形成した。

移動商人達がそれぞれの各地の珍しい品を売る。

「昔の知り合いで、あんたに惚れていたねえ」

魔王サウロは自分をジロジロとみつめる視線を無視する。

ただつ広い、薄暗い魔王の城の王座に座るプリン。

別段と気にした風もなくサウロは立ち去ります。

先ほど、物語の更新があつたばかりなので

次の更新まで間が空きそうだ。

つまりは、自由の時間。限られた檻の中での自由。

「どんな顔なのかしら?」

人事だと思つて暢氣なプリン。

「さて、どうするか…」

一人で思案する。

現在の移動候補は

- ・砂漠地帯

- ・オアシス

- ・遺跡迷宮ペリフリックド

「勇者の位置は砂漠のレベル上げで停止しているな」

プリンが提案する。

「モンスターの意見を聞いてみましょよ。

この前みたいなスラリンみたいのを探してみようよ

サウロはプリンの意図に気づいたが却下した。

確かに自分はモンスターの王であり、彼らは命令には従う。

けれど運命を止める力は自分にはないのだ。

それに…

「砂漠の敵はミミズワームらしく、知能はほほ期待できません。

つまりは会話は不成立というわけだ」

プリンは不満そうだが納得した。

「なら、勇者は？」

「まだ近づくのは俺としてはゴメンにしつむりたいな」

プリンとサウロは無言で互いに想い出す。

物語の進行の上とはいえ、どうしてもスラリンを倒した勇者モナに

まだ快く近づけそうになかった。

今は避けたい。

そして移動先の結果は

「オアシスね」

「まあ、あまり期待はできないがな」

城下町と同じ、繰り返し会話の設定しかないキャラのみなら

行つても会話は成立せずには意味になる。

だが、それでも「ここのよつは気がまぎれそつだ。

サウロは自分自身の心理変化に少し怪訝に思つ。

憂鬱な精神の設定ではあるが、プリンに感化されたのだろうか？

「ほら、また男前が眉間にシワ寄せて悩まない。

「悩む位なら、ひとつと行動しましょ！」

ある意味羨ましいと思いつつ、プリンの手をとり瞬間移動をした。

「なんか雰囲気あるわね」

オアシスは湖を囲い、移動式住居のテントが建つている。

ラクダが何頭も木に繋がれて、道行く人々も羽織を被る。

色々な人がそれなりに行き交う中、誰も一人に声をかけない。

プリンは町娘の軽装・サウロは人の姿に魔法がかかっている。

「つまりは固定キャラで会話もお決まりって事だな」

サウロはため息をつく。

プリンが試しに近くの女性に声をかけた。

「ちょっとお話しですか？」

「あらこんにちは。ナツメの実はいかが?」

「いえ、あのお話を……」

「あらこんにちは。ナツメの実はいかが?」

ダメだこつやと両手を挙げてサウロの元に戻ってきた。

サウロも苦笑する。

「ただ話しがしたかつただけなのにね」

少しでも何か掘めたら、それだけなのにとプリンは思つ。

そんな気持ちを察してかサウロが提案した。

「話が出来る可能性がある人間だな」

ふむとサウロは頭をひとかきして

「可能性があるのはキャラバンのリーダーだな」

まだ少しは設定され、勇者モナを遺跡に導く彼なら

少しは会話が成立するかも知れない。

二人で一番大きなテントに向かう。

中にいたヒゲ顔の中年男が一人に声をかけてきた。

「おや？まだ出番はまだのはずですが…ええっと」

一人の設定を思い出せりうとしているのか、頭を抱える。

だが浮かぶはずもない。

当たり前だ。本来ならこいつはならぬ存在なのだから。

「この人しゃべれる……やつた……」

無邪氣にひしゃべフリ。

ピヨンピヨンと横で跳ねるのを無視してサウロは説明した。

いわく、自由時間に移動している事。

いわく、設定に疑問を持つこと。

そして、何かをかえる方法がないか探している事。

キャラバンの男は不思議そうな顔をする。

「そんな疑問すら浮かびませんね

「普通はそうだな

サウロも納得する。自我が芽生えた事すら不思議なのだ。

「ですが、それを言つたら、今現在会話をしている私もバグですか

ね？」

「バグ？」

二人は顔を見合わせる。

「ええ、設定ミスって事だと思つのですが…」

設定ミスという言葉にサウロとプリンは固まる。

「いえね、私実は別の話でも使われる存在だったみたいですね。

いや、これはこの話の設定には関係ないので二人は知らないでしょ  
うがね」

「別の話？」

「ええ、この世界はあくまで一つの作品の世界なんですね。

でも、別にも沢山の作品の世界がありまして…」

初耳だった。そんな発想すらなかつた。

男は話続ける。

「なので、あくまで私は別の世界を知っています。

それすら本来ならいらない知識でしょ」けどね。

で、その別世界では想定外の事をバグといいます」

プリンが男の肩を力任せに揺さぶった。

「何それーもっと教えてよーーー。」

ブンブンと男の体が揺さぶられ田を白黒させる。

サウロはプリンを止めて男に話を促す。

「それで？」

「いえ…その…」

肩を揉みつつ男は答える。

「それだけですか」

「他の世界に行く方法はーーないのーーー。」

プリンが必死で聞いた。

「おー、プリン」

止めるサウロにプリンはペジャリヒー。

「他の世界なら私達は違う運命かも知れないじゃないーーー。」

プリンは必死だった。

だがサウロは否定する。

「違う運命でも、自由ではないな」

その言葉にハッとした顔でプリンは静まり返った。

「あくまで私達は作られた世界のキャラですし受け入れるのが当然ですな」

男は言う通りだった。

サウロは男に聞いた。

「お前は自由が欲しくないのか？」

男は即答する。

「なぜですか？」

そして二人はテントを去った。

もう聞く話はなかったからだ。

プリンは黙り込んでいた。

サウロは肩に手を添えて、自分の城に連れ帰った。

玉座の裏でプリンは肘に顔を埋めたまま座り込んでいる。

黙つて付添つていたサウロが聞く。

「 もへ、やめるか？」

プリンは無言で首を横に振る。

「 やうか…」

そして黙つてプリンの傍に立ち尽くす。

どれ程に時間がたつただろうか。

静かな部屋にプリンの声だけが小さな声で聞こえた。

「 やっぱり無理なのかな？」

弱々しい声だ。

サウロは答えない。

少し間が空いて、また再びプリンが口を開く。

「 無理なのかな？運命とやらから、設定から自由になるなんて。

私は勇者と姫と三角関係になつて…そして最後はどうなるんだろ？」

それはまだわからなかつた。

全ては作者次第で、そこまでの設定は出来ていない。

いや、それすらも途中で変えられて魔王であるサウロ

殺される運命すらありえるのだ。

「ただの宿屋の娘なら良かつた…」

また顔を伏せた。そして…

「あんたが殺されるのはなんか嫌だ」

サウロが言つ。

「お前らじへないな。人を半ば強引に連れ出しておこて

憎まれ口にもプリンは反応しなかつた。

「今更どひじよつもないが、一つ収穫はあつただらうが」

ピクリとプリンの頭が動いた。

「バグだそうだ。想定外の事。我々がそつだとしたら

それはそれで可能性が出来たという事だらうへ違ひのつか?

ゆつくりとプリンがサウロの顔を見上げる。

「どうこう事…」

「お前は案外馬鹿だな」

「なつー。」

やつとプリンにも元気が出てきたようだ。

「想定外といつ事は、予測できんといつ事だ」

「だから、どうこう…」

「予測できない、それが自由だといつのが我々だ」

プリンが田を見張る。

そしてバツと立ち上がりサウロに抱きついた。

突然の事でサウロは固まった。

「そりよーー私達は自由なんだわーーあんたの言ひ通りよーー」

体から離れ、今度はサウロの手をとつて万歳をする。

「ならこの世界から抜け出せる方法も予測不可能にあるかも知れな  
いわ」

「世界から？」

「そりよーーあんたと私が幸せを迎える世界」

——「」とプリンがサウロに笑いかける。

サウロは何か言いたげな顔を一瞬したがやめかわりに少し微笑み返した。

一人は魔王の城の中にいた。

この城の主が言ひ。

「さて、今度の出番はまだ時間がかかりそうだが」

姫の替え玉として攫われてきたプリンはなぜか壁をスリスリと触つている。

怪訝に思つたサウロが聞いた。

「何してるんだお前は？」

「あ、なんか隠し部屋とかないのかな？なんちゃって」

とペロッとした舌を出して誤魔化した。

サウロは田頭を手で覆いつ。

「そんな設定はないな

「だよね、つまんない

自分のせいかとサウロは思つたが言ひだけムダなので黙つた。

「とにかくこいつはつまんないし……そりゃ

「どうする？」

「魔者モナに会つてみよつか？」

サウロは不愉快そうに手を細める。

「なぜだ？」

「いや、あのや」

サウロが不機嫌になつたのを感じて、慌ててプリンは手を振つた。

「だからせ、そんなに嫌つ事ないじゃない」

「やつこつ設定でな」

「だからせ、設定だとやつだけど、私達つてバグなんでしょう？」

「らしいな、だから？」

「だから一番設定が組み込まれてゐるモナなら会話が成立するかも  
よ？」

プリンは必死にサウロを説得する。

だがサウロは切り捨てた。

「会話だけならな」

「だつたり也會ひても…」

「今つて話してどうするつ。戦闘になつたらつ。」

「え？」

サウロの | プリントロンが固まる。

「なんで? エ?」

「だから、俺とモナは運命が違つ。つまり奴にとつては

全てが奴の栄光への踏み台みたいなものだ」

「でも疑問に…」

「血りの設[定]に満足してこつたりひつかる?」

「う…」

プリントロンが言葉につまむ。

「そして設定外の戦闘が起つて、そして互いにに戦えば…」

「戦えば…」

サウロは唇をゆきへつとせきながら唇へ。

「全ては終つするな」

「…」

「あくまで俺の予想だがな」

プリンは否定しなかった。いや、できなかつた。

その通りだ。既に自由に動き回つてゐるのがオカシイのだ。

バグ。そのうえで致命的なバグが起こつたとしたら?

想像すらできないが、まつてゐるのは終了でしかない。

すなわち自分達も含めて全てが消える。

物語が進行できないのは致命的だつた。

もがけばもがくほどに絡まる糸のようだとサウロは思つ。

だが、それでも短い自由の時間が嫌だつたかと言われば

サウロは否と思つのだ。

結果はどうであれ、あがく今こそ自分は自由なのだと実感する。

それが不思議と心地よいのだ。

「なら…」

プリンは顔を上げる。

「なら、モナは一番最後にしよう」

サウロも、それに頷いた。

「ともかく今は…んーと、砂漠にいるのねモナ。

だったら別の場所に行つてみましょー」

サウロは即答した。

「一つしか残つてないな。現時点において遺跡ペリワードのみだ」

「なら決まりよーーそこに行きましょーーー。」

パチンとプリンは威勢良く指を鳴らしたが

イマイチ音が気に入らないらしく、何度も指を鳴らす。

苦笑しながらサウロはプリンの手をとった。

不思議そうに頭一つ上のサウロを見上げるプリン。

「あまり氣は進まないが行つてみよう。ここにいても仕方ない」

「そうね」

そして一人の体は瞬時に移動した。

藁でも掴む気持ちで一人はダンジョン内を進む。

ピラミッド内は煌々と松明が焚かれ視界には困らない。

ただひたすらに、一人は設定通りに奥に住まつ主のもとに向かう。

会話ができるモンスターとの遭遇は一切なく

数回程度のザコモンスターとの遭遇はサウロの姿を見ただけで去つて  
いった。

「ムダな戦闘をしなくて済んだだけ有難いな」

「本当ね」

サウロの言葉にプリンも同意する。

戦闘になればサウロは負けないだろうが

非戦闘員キャラのプリンは見守るだけであるし

何より設定バランスが消える可能性がある。

何が起こるかわからないバグとはいえ、変化は極力抑えたかった。

一人して狭い通路をひたすら歩く。

サウロが先頭に立ち、罠などを警戒する。

いつ作者が思いつきで設定をいじるか、わからない危険もある。

本当に作者といつ神の手のひらの上だな…

血嘲氣味にサウロが口の端で笑つと、プリンが氣味悪そつこ

「その顔やめてくれる?」

「なぜだ?」

「悪者みたいだから!」

「…」

どれ程に歩いたどうか、ひとりわ大きな朱色の扉の前に辿り着いた。

「いいね

「やうだな

先頭のサウロが感慨深げに扉を開ける。

ギギッと重い音をたてて、あっけなく扉は開いた。

中はただ広く、周囲が水で囲まれ

扉から一直線に通路と、そしてその先の王座が島のよつて浮いていた。

壁は大理石なのか白く輝き、美しい彫刻で飾られている。

「案外、趣味いいわね」

プリンがため息をつく。

王座には人影がある。

それこそが、この迷宮ピラミッドの女王。

彼女に会つために一人はやつて来たのだ。

二人が歩き王座に近づくにつれ

人影がはつきりと、その容姿さえわかる距離に近づいてくる。

「何用じゃ」

その女は言つ。

「まだ出番ではないであろうー控股集团ー！」

人に命令するのに慣れているふうであり

一瞬プリンはギクッと身を竦ませて

平然としているサウロの服の裾を握った。

二人は彼女の前に立つ。女は座つたままだ。

田のふちを黒くふちぢり異国情緒溢れながら気品に満ちた美しさ。

そう、この女こそ女王ナノーケ。

迷宮ペルソナ3にて勇者モナと敵対するボス設定の存在。

そして

「サウロ様！ 貴方様はサウロ様ではないですか！！」

女王ナノーケはサウロの足元にひれ伏す。

先ほどまでの威厳と高飛車な態度とは雲泥の差だ。

「ああ、なんと嬉や、わらわの元に愛しきサウロ様が」

媚びるよにサウロを見上げるナノーケ。

だがサウロは何の感情も湧かず、冷徹な表情で見下すのみだった。

ナノーケは真横にいるプリンなど田に入らぬかのよう

ただ一人でひたすらサウロに熱く語る。

「この迷宮に籠つて、世を捨てた身とて、貴方様の事は忘れた事などありませぬ」

スラリとした肢体をくねらせ立ち上がる。

形の良い腕をサウロの肩にそっと乗せた。

「ああ感無量……もつわらわは死んでもいい……」

「死ぬ前に話しがしたいんだが

サウロはグッとナノーケの手を掴み振りほどいた。

「何でいじれこまじょ。わらわは貴方様の為なり……」

「いや設定とは無関係で頼む」

ナノーケはその言葉に首をかしげる。

そして不思議そうにサウロだけを見つめながら王座に座った。

## 女王ナノーケ

女王ナノーケは熱い瞳で王座からサウロを見つめた。

一瞬だけ、その視線に嫌そうな顔を見せたサウロだが

ともかく会いに来た目的を告げた。

「今、閲覧者がいない我々の自由時間だと理解しているか？」

「ええ、勿論ですわサウロ様」

ナノーケは優雅に頷いた。

プリンは向やうりサウロの後ろでモゴモゴと言ったそな素振りを見せたが

ともかくサウロが制して話を続ける。

静かな王座の一室でサウロの声だけが響く。

「俺と、この後ろの娘で自由になる方法を探している

自由といつ葉にナノーケは一瞬ビクリとしたが

すぐに平静を装った。

「それで？」

「知つてこる事ならなんでもいい話を聞かせてくれ」

ナノーケはプリンを一瞥して、小さくため息をつく。

そしてシャランと腕輪を鳴らして腕を胸の前で組んだ。

「ムダだとだけ申し上げますわ、愛しい人」

静かにナノーケは告げる。

「創造主に逆らつなど愚かでしかありません」

なんの躊躇もなく言つてのけた。

プリンが前に勢いよく出ようとしたが、サウロに口を塞がれる。

ナノーケは今度は馬鹿にした視線で、あからさまにプリンを笑った。

「その女の入れ知恵ですか？ 貴方ともあらう方が」

サウロはプリンの口を封じたまま、冷静に答えた。

「最初はそう思つたがな…」

そしてナノーケに伝える。

つかの間の自由の時間。そしてバグという存在。

「あがいてみるのも一興でな」

口の端で寂しげな笑みを浮かべてサウロは言った。

「所詮は決められた運命で俺もお前も倒されるんだ。不満はないのか？」

ナノーケは無表情に答えた。

「いいえ」

サウロとプリンは一瞬無言になる。

ナノーケの黒ブチの大きな瞳には搖りぎも迷いもなかつた。

ある意味、この態度こそが小説の創作物として当たり前の態度かも知れない。

「そのような迷いが生じるのは、貴方様の設定がまだ不明確だからですわ」

ナノーケはゆっくりと立ち上がる。

サウロに近づき、そして横にいるプリンを容赦なく押した。

ドンッ！

「いたつー向すんのよー」

尻餅をついたプリンの抗議など聞こえぬよう

ナノーケは、その柔らかい女の肢体をサウロに擦り付けた。

「不明確？」

動じずサウロはジッとされるがままにナノーケに問う。

「やうですわ」

クスリと小さく女王は笑つた。

「貴方様は主人公の次に大事な存在。つまり未来は不明確で創造主も全ての設定は完了していない。それゆえの迷い」

背の高いサウロの顔を見上げ、顎に手を当てる。

優しく撫でながらナノーケは語る。

「私も倒される運命だとして、詳細に出番間近ゆえに

運命は明確に決められています。それに……」

「それに？」

ナノーケにされるがままにサウロが問う。

「今、現在において私が一番、創造主に新しく作られた存在です。

すなわち思いが強い」

「だからなんだ？」

「それだけ固定されているといつ事です。全でが…」

「つまり不満はないといつ事ね」

プリンが横槍を入れた。

だが女王は返答しなかつた。

ただ愛しい魔王に熱い視線をおくるだけ。

サウロはプリンに振り返り、手をとつてナノーケに背を向けた。

「用はなさうだ。帰るぞ」

プリンが頷いて動き出そうとしたその時

「お待ち下さい」

ナノーケから咄嗟に言葉をかけられ、一人は振り返る。

「なんだ」

「なぜ、その女と共にいくのですか？」

ナノーケは憎憎しげにプリンを睨む。

「その女が、どうやら元凶のようです。」

「共に行くなら私と…」

サウロはキッパリと切り捨てる。

「お前は自分の運命に不満がないのだろう？」

だからと続けようとした言葉はナノーケによつて消される。

「当たり前です。創造主の思ひは私に現在一番理解できます。

創造主はこの話を完結させる事すら迷つています」

二人は沈黙して顔を見合させた。

「なんだと…」

「どういう事…」

二人の疑問にナノーケは平然と言つてのける。

「だから、完結しないという事ですね」

「どうなるのよ…」

プリンが食つて掛かる。

もし完結しないなら、この世界は？自分たちはどうなるのだ。

ナノーケはピシャリと言つてのけた。

「完結しなければ、ただ漂い、いつかは消えるだけですわ」

だから…とナノーケは一瞬息をついて続ける。

「だからこそ、私達は設定があるだけ満足をして

指定された運命を受け入れ従わなくては」

それは、ナノーケが間もなく倒される運命。

「それでも、つかの間に自由を謳歌するならサウロ様。

その女でなくとも良いのではないですか？」

サウロの形良い眉がピクリと動く。

優雅にナノーケは自らを指し

「私でも良いのでは？私こそあなたにふさわしい…」

再びサウロに触れようと手を伸ばしていく。

サウロはプリンの肩を抱き寄せた。

「お前の愛しい気持ちすら思いの強い設定のせいだ」

複雑な感情を瞳に宿して、二人はナノーケを残したまま

魔王の城に帰還した。

勇者モナはオアシスより受けた以来

魔物が沢山住む迷宮ペリペリで入っていった。

沢山の魔物がモナを襲つたが、なんとか倒し

そしてとうとう、ボスである女王ナノーケの前に辿り着いたのだ。

「おほほほ、そなたがモナかえ」

女王はモナに向かつて一発のファイヤーボールをぶつけた。

モナはかるうじて、それによけた。

なんとか倒さなければ世界の平和のためにには

自分は選ばれた勇者なのだから。

「だから僕はお前を倒す！！」

剣をふりかざし、モナは一直線にナノーケに切りかかる。

「いっやくな」

女王は強く、魔法がモナに襲い掛かる。

ここまで生き延びたモナは必死でそれによけ

何度も剣を振りかざした。

「お前はサウロ様の敵!!」

ナノーケは大きく息を吸い、そして口から炎を吐く。

剣も女王の鉄に変化した手によつて防がれる。

「負けるもんか!!」

何度も、ぐじけそつになりながら体をひねり

そして全身で向かっていく。

「じつこい」

女王は生意氣だとばかりに、その体を変化させた。

モリモリと音がして、腕が両脇からそれぞれ2本生える。

モンスターの最終形態。

モナは回復の魔法を自分にかけつつ、戦いの終りが近い事を悟った。

剣を両手で支えなおし、そして体ごと突進していく。

「うつやああああーー！」

光りが炸裂して、そして長い戦いに決着がついた。

倒れたナノーケがくやしそうに最後の言葉を吐く。

「サ…サウロ様」

そして一瞬にして光の粒と化して消え去った。

戦闘に勝利した。

勇者モナは経験地を手に入れた。レベルが1つ上がった。

ナノーケが消えた場所に宝箱が出現した。

モナが開けると、中から鍵が飛び出した。

「何の鍵だろ？？」

不思議に思いながら、モナはそれを荷物袋に詰めた。

そして、疲れた体をひきずつて、新たな魔王への道に歩みだした。

続く

話が展開される中、魔王城にいた一人には出番もなく

また関係もない事だった。

体で感じる、新たな展開を一人で見守る。

「終わったみたいね」

プリンが告げる。サウロも無言で頷いた。

「今回の女王はあれで良かつたのよね？」

肯定して欲しくて言つてこるのは確實だった。

そんなプリンも、完結の件の話を聞き不安で仕方ないのだろう。

「一つ、またわかつた事があるな」

サウロが誰にもともなく、独り言のよつとびやこした。

「何？」

「創造主の思ひことやうじと、未完結の未来だ」

最後の言葉にプリンは身を竦ませた。

サウロは少し気遣つよつとプリンの顔を見る。

「あくまで、仮定の話だ。確定じやない

「わうよね……あと、思いの強さつて？」

サウロはプリンに自分の感じた答えを教える。

「新しく作られたキャラには、作り手の気持ちが強いらしー

「そうよね、だからナノーケは自分に疑問も持たなかつた」

「うんと、暗い気持ちをふつきむつに頭を強くふる。

「バグが発生しにくいついう事だひつ。それと」

「それと?」

「会話が成立するのは確証されたな」

プリンは両手で頭を抱えて、うんうんと思考をめぐらせた。

そして、少しして

「わかった!」

パチンと指を鳴らしたが、やはり音が気に入らないようだ。

「これから新たなキャラを用意して会話していくよーーー。」

「ハニコと指をパチパチさせつづプリンが言つ。

「創造主の思いが強いって事は、これからも新しい情報が

得られる可能性が高いって事だもん!」

新たな可能性が広がった事にプリンは笑顔を見せる。

「正解だ。前向きになつて良かった」

サウロの言葉に、元気を取り戻したプリンがふくれつづらで

「こつも前向きです」

と、むくれてみせた。

静かにサウロは笑いつつ、おかしなものだなどプリンを見る。

そして血の心の奥にある不安を隠すように

互いにまた、次の出番を待つのだつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6185z/>

テンプレワールド～魔王は退治されたくありません～

2012年1月14日18時53分発行